

テキストにおける表記法の役割及びその重要性について

札幌大学総合研究 第11号 (2019年3月)

〈論文〉

テキストにおける表記法の役割及びその重要性について — 日本語学習者への指導という角度から —

劉 金挙・姚 丹

〈摘要〉

現代日本語は、世界的に稀に見る複雑な表記体系があり、作者の意図をよりの確・より効果的に伝達し、作品を豊富多彩なものにするのに役立っている。テキストの読解や文章作成について外国人の日本語学習者への指導をする際、この表記体系の構成や使い方や重要性などを理解し、使いこなしてもらわなければならないのである。

〈キーワード〉

テキスト鑑賞 文章作成 表記体系 作者意図 表現効果

はじめに

現代日本語は、表意機能を果たす漢字・表音機能を果たす仮名（主として万葉仮名を崩してできたひらがな、万葉仮名の部首をとってできたカタカナ、そして変体仮名）・ラテン＝アルファベット（ヘボン式・訓令式・日本式のローマ字）・アラビア数字や α や β などのギリシャ文字などの組み合わせという文字体系に、音読みや訓読み、句読法、異体字、振り仮名（ルビも含む）、送り仮名、書字方向（縦書き・横書き）と折返し方向などの表記規則が加わる、という、世界において稀に見る複雑な言語表記体系を持っている。

原則として、日本語のテキストは、実質的な意味・概念的意味を表す部分（名詞・動詞・形容詞・形容動詞）が漢字で、文法的意味を表す部分（連体詞・感動詞・助動詞・助詞・形式名詞など）がひらがなである。さらに突っ込んでいえば、和語（固有成分）は主にひらがな若しくは漢字、非固有成分の漢語（近代中国音を除く）は主に漢字、外来語は主にカタカナ、というふうに、漢字・仮名まじりのものである。

しかも、長い歴史上に形成されたこのような複雑な表記体系は、単に言語を表記し、知識の蓄積の要となるのみならず、伝統を伝えるものとして、日本文化の形成・継承にも非

常に重要な意義がある、という文化的な側面もある。

ゆえに、テキストを鑑賞する際、ネイティブ・スピーカーにとって、当たり前で自明なものに見えるこのような日本語の表記規則、乃至は暗黙のルールとして見みなされてきたものを理解・熟知した上で、作者がこのような表記法を意識的に巧妙に利用することを通じて、よりの確・より効果的に伝えようとする意図を読み取ることが非常に重要である。当然なことに、文章を作成するときに、このような表記体系の活用も同じく重要である。殊に、異文化を背景とする外国人学習者への指導をするとき、上記のことを重視すべきである。

本稿は、テキストにおける漢字、語彙、ふりがな（ルビ）、句読法の使用を例にして、このような表記体系の重要性を見ていくものである。

1. 漢字語彙の働き

現代日本語は、漢字・仮名交じりという表記法が受け継がれ、漢字が依然として多用されることに関して、子音と母音の組み合わせという単純な音節構造による日本語は、同音異義語がたくさんあるため、適切に漢字を使うと、文の意味の理解時、混乱・間違いを避けるのに役立つことと、漢字が音（音声指示作用）と意味（概念指示作用）の両方を兼ね備えた音声文字・表意文字であり、「心理学・言語心理学・神経心理学・臨床神経心理学などの分野で漢字の処理について」の研究により明らかにされているように、「アルファベットと違って、漢字は文字としてではなく絵画として処理される。表音文字と違って、漢字は直接意味にアクセスする」¹⁾ため、視覚化され迅速に理解できることと、漢字・仮名交じりという表記は、漢字が「ローマ字表記の場合の『わかち書き』に当たる役割を果たし」、「視覚としての言葉の『まとまり』が絵画化されるため」²⁾、語としてのまとまりを暗示し、「いずれの条件下でも、漢字の認知時間の方が仮名の認知時間よりも、有意に小さかった」³⁾とあるように、テキストの読解が高速的にできること⁴⁾、それから、「日本では、

1) カイザー シュテファン [1996]「漢字教育をめぐる基礎問題——漢字と表音文字の処理は違うものか——」『日本科学教育学会 年会論文集 20 (1996)』, p101。

2) 本多勝一 [1982]『日本語の作文技術』朝日文庫, p128。

3) 田中博正 [1992]「仮名と漢字の認知時間に及ぼす言語的発声活動と打叩活動による葛藤効果」『川村学園女子大学研究紀要』第三巻, p108。

4) 小山内一陽子「漢字・仮名まじり文の読みやすさ」(『人文科教育研究 XV Ⅲ 1990年』, p91)は、30%前後の「漢字・仮名まじり」文が読みやすい。その理由は、「視覚的符号化、つまり語としての弁別性が、30%前後の漢字を用いた場合に最も効率的に働くからなのではないだろう」ことにある。漢字の使用率が最も高い新聞にさえ、漢字の使用率は、41.46%である、としている。

三種の文字によって、語の出自を区別しています（中略）このようなシステムが千年以上に及んでいるのです。こうした特徴を無視すれば、文学はいうまでもなく、日本のあらゆる諸制度・思考を理解することはできないはずで。というのも、諸制度・思考は、そうしたエクリチュールによって可能だからです。」⁵⁾とあるように、長い歴史により鍛えられたこの表記体系を軸に、日本民族は、民族としての自己同一性と文化を育て上げたということなどがよく挙げられる。つまり、日本語のこの表記法は、『書き分けの原則』に機械的に従うだけで出来るような単純なものではなく、前後の語とのバランス（視覚的な美しさと読み易さ）や当該文書の性格など、多くの要素を総合的に考慮して行なわなければならない。適切な書き分けには審美眼（taste）や社会常識（common sense）も欠かせないのである。」⁶⁾

文字数を気にしなければ、日本語の文章は丸ごとひらがなやカタカナで書くことも可能であるが、歴史的な原因で、今日に至っても、法律、行政などの専門用語がほとんど漢語彙で、学術論文や改まったビジネス文書で漢字が多用されることが示しているように、漢字表記が多い文章は、学術的・高尚的色彩が強い。このことは、日本・日本語の歴史をある程度把握している外国人に対して説明するまでもないことであるが、テキストの作成・鑑賞に際して、次のことをも理解しなければならない。

1.1 伝統による漢字の神秘性

「言霊信仰」などの影響により、漢字には神秘的力が潜んでいるとされ、「名詮自性」という昔ながらの考えができ、「渡辺」と「渡邊」の区別が存在するように、ある字に執着する人もいるし、文字に神秘的機能を求め、字の画数に拘る「生命鑑定」⁷⁾もある。

今日よく挙げられる例としては、異体字と変体仮名の使用がある。

異体字とは、形・音・義という漢字三要素のうち、音および義が正字或いは通行字体と共通し、字形のみ異なるものである。記号論の観点から定義すると、異体字は、「記号の形態は異なるものの、それが指し示す対象物は同じである文字の集合」⁸⁾で、辞書的には同じ意味を持つが、心的表象という面から見れば、字体の違いによって、異なるイメージや感情的成分が生み出されるケースも少なくはない。

したがって、歴史的な原因で、例えば国語改訂などの場合における新字や旧字の違いに

5) 柄谷行人「2008」「日本精神分析再考」（講演）<http://kojinkaratani.com/jp/essay/post-67.html>。

6) 横山秀世「1990」「仮名・漢字の書き分けについて」『研究紀要 30』, p103。

7) 姓名鑑定は、読み下し・陰陽の配列・五行の組み合わせ・天地の配合・画数などによってその人の運勢に関わる人名を判断する中国由来のものである。

8) 横山詔一「2001」「視覚的情報と意味」平沢洋一編『電脳意味論』（日本語教育学シリーズ第4巻）おうふう, p53。

よるものもあるが、現在に至って主に手書きによる個人差から生じたものや、自分の願いを込めて意識的に選んだものが多い。命名する際、崎（11画）・埼（11画）・崎（12画）・碕（13画）から、自分にとって縁起のいい字をとることがそれぞれである。

テキストの場合、漢字は画数が多いと格好良いと思う人がいる。例えば、「知恵」より「智慧」の方が深淵そうだし、「両生類」よりも「両棲類」の方が賢い人が使うような雰囲気がある。ほかには「反乱」と「叛乱」、「日食」と「日蝕」、「賛美歌」と「讃美歌」なども挙げられる。そこで、作家は自らの感性や物語の世界観に合わせて、どちらの漢字を使うかと決める場合が多い。

最後に、街の「言語景観」の要素として使用される変体仮名である。

「みつは志」という看板の蕎麦屋がある。仮名表記だったら、「みつはし」であるが、この店は、「し」を、「志」をくずした変体仮名にしたのである。ここで、「志」という漢字は、お客にベストを尽くすという意志表明にもなる、という。

1.2 漢字語彙の使用による心象的イメージ

まったく新しい塔を創る（下線は筆者。以下同じ）。

これは修復や模倣なのではなくて、ゼロからの創造の営為なのだ。平成の御代に、平成の人々の浄財喜捨を集約し、平成の宮大工の技術を集大成して、どこにもないものを創るのだという志が、おのずから天を衝く塔の形となって、今天壤の間に現れつつある。そうやって二百年後の重要文化財を創っているのだという気概が、現場に満ち満ちている。

すばらしい光景だった。（林望「夢を立てる人々」『私の好きな日本』）

1986年11月から1990年中頃まで続いたバブル時代に、財テクブームが沸き起こった結果、物欲にまみれ、お金儲けや娯楽や奢侈な生活にしか関心を持たない若者が多く出現したのに対して、バブルがはじけた直後の「失われた10年」間に苛まれた「不運な世代」の若者達は、希望のない混沌とした生活を暮らしていたとされる。この問題を解決するために、「日本人としての自信や誇りを抱くには明日への希望が必要だ」という声が高まった。林望『私の好きな日本』は、まさにこの要望に応じて生まれたかのような本である。一生懸命に塔を造っている三十歳代の宮大工、とりわけ一切を率いる四十八歳の棟梁の努力ぶりに感動し、作者は、「日本はまだ捨てたものじゃないぞ。日本の若者たちも捨てたものじゃないぞ。私は、涙ぐましい思い」になったのである。

この文章には、「修復」「模倣」「集約」「浄財喜捨」「技術」「現場」などの「中性」的な感情を表わす漢字語彙が多く用いられているのみならず、「営為」「集大成」「天壤の間」「気概」など、プラス的感情を表わす漢字語彙も多用されており、殊に「天壤の間」とあるように、

ルビをつけることによって漢字語彙ならではの厳かなモードを醸し出し、作者は、自らが「涙ぐましい思い」に至らせた原因を読者に強く訴えている。

最も効果的なのは、普通「塔を造る」と書くところを「塔を創る」と書き、宮大工たちの仕事の意義を強調する用法である。これに関しては、後に「同訓異字」の部分で分析していく。

1.3 漢字の音声指示・概念指示・象形などによる連想的意味とイメージ

次のような例は数えられないほどある。札幌定山溪温泉行のバス・ターミナルに「湯らり 湯られて 湯のけむり」という看板が立てられている。ひらがなの「ゆ」を全部漢字の「湯」に取り換えて書くことで、温泉を宣伝するのである。町中よく見かける「春夏冬二升五合市」⁹⁾ = 「商い ますます繁盛」などのように、漢字の巧みな使用により、語呂合わせ・洒落などの効果を達成し、独特な意味あいを連想させるものも多い。

II、同じ意味を表わしながら違ったモードの語彙選択による作者の意図

文学作品は、作者が「ことば」の特性を最大限に使いこなして創作したものである。したがって、自分の目指した効果を醸成するため、いかにして適切な語彙選択をはじめとする諸手法を用いて読者に伝えるか、というのは、作者が、いつも工夫しなければならないものである。

礼状は問題ない。いかにして弔辞を売りこなすか、だ。ここが商売人の腕の見せどころ才覚の働かせどころ。とはいえ、こちらは場末の名もない古本屋。百円の文庫本や漫画を、ほそほそあきなって糊口する、しがない小あきんど。一流どこの老舗の如く、全ページカラー写真の豪華目録で、「近来稀なる超極稀品」と、何が何やろうわずった張り扇と鳴り物入りで、うたう資本もない。漱石の手紙、とひとこともらせば、現金しこたまのポストンバッグ片手に血相かえて駈けつけてくる、お大尽の得意も持たない。(出久根達郎「漱石を売る」)

出久根達郎「漱石を売る」の一節である。売主の巧みな「抱きあわせ」販売手法に操られ、最初に、かろうじて漱石の手になる礼状と弔辞を入手し、それによって大いに儲けられるだろうとワクワクした古本屋は、「入手時の興奮がさめるにつれ」、「えらいものをつかまされた」と分かり、「銭かねの勘定ばかり心配になった」。なぜなら、「私」は、僅かな「もとで」で苦勞し、「損したら、それだけでなくさえ安割箸の如ききゃしゃ屋台骨が、根本から真っぷたつ」になるほどの、「ほそほそ」とした「あきな」いでやっと「糊口」できる

9) 「春夏冬」だけで秋はない=商い、「二升」の升は二つの「ます」=「ますます」、「五合」は一升の半分 = 「はんしょう（繁盛）」という意味。

という生活に喘いでいる「小あきんど」だからである。庶民の口でよく交わされている上記の日常的な言葉は、読者に「商売人」の苦しい状況を生き生きと伝えるのに役立っている。

もう一つの例として、有名な芥川龍之介「羅生門」が挙げられる。

「僕の昔の事を書く時に、どんな眼で昔を見てゐるか、云ひ換れば僕の作品の中で昔がどんな役割を勤めてゐるか（中略）僕は昔の事を小説に書いても、その昔なるものに大して憧憬しょうけいは持つてゐない。僕は平安朝へいあんてうに生れるよりも、江戸時代に生れるよりも、遙はるかに今日こんにちのこの日本に生れた事を難有ありがたく思つてゐる。」¹⁰⁾とあるように、芥川の目的は、「昔」を再現するものではけっしてなく、作家としての認識と日本の現実とを踏まえ、原作を「舞台」にして新しい意味を加えたり、乃至はそれに取り替えたりしたのである。

羅生門すざくおおじが、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠いちめがさや揉烏帽子もみえぼしが、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。（中略）鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄つばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限こくげんが遅いせいか、一羽も見えない。（中略）その主人からは、四五日前に暇あひだを出された。（中略）申まをの刻下こくさがりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない……。 （芥川龍之介「羅生門」）

小説の中で、「市女笠」や「揉烏帽子」という換喩の使用によって、読者の頭の中に古代日本人の形象を立体図のように浮彫しているのみならず、「時間」の代わりに古代（物差しに見える道具から）時間を見測る「刻限」、「解雇された」の代わりに「暇を出された」、「16:00～18:00」の代わりに古代の「申の刻下がり」、というふうに、言葉遣いによって、「今日のこの日本に」生まれ暮らしをしていた日本人に、「平安朝」のムードを思い浮かべさせることに見事に成功している。

ついでに、上記のような実質的な意味を表わす言葉のほかに、接続詞や副詞なども、テクスト全体のムード醸成にも役立つ。

われわれがごく常識的にそれを自然と考えていたものが、実は半自然であったということになると、改めて考え直さなければならないことがすこぶる多いことに気づく。私はかつて北部ラオスの山地をルアンプラバンからナム・ターまで飛んだことがある。ナム・ターは同名の県の首府で雲南国境にまちかい町である。したがってこのルートはラオスでももっとも奥地の上空を飛んだはずである。それにもかかわらず、複葉布張りの飛行機、したがってごく低空を飛ぶ機上から俯瞰した山地の森林には、いかにも二次林が多いのであった。（岩田慶治「自然のありか」）

10) 芥川龍之介 [1971]『芥川龍之介全集 第四巻』筑摩書房, pp. 148-149.

私たちが普段目にする「自然」は、実は人為が加えられた半自然で、私たちが身の回りのすべてを見るのも自分の馴染んだ「文化のフィルター」を通してなのだ、ということ論じる文化人類学の文章である。ここで「非常に」「もう一度」「大変」「だから」「それなのに」などではなく、より改まった感じの「ごく」「改めて」「すこぶる」「したがって」「それにもかかわらず」を使うところも、文章全体を哲学めかせるのに寄与している。

Ⅲ、表記法の併用・変容による効果

異なった表記記号の使用、とりわけ、普段使い慣れた表記記号から違った表記記号への変容は、文章に修辭的意味を与え、深みを与えることにもつながる。

3.1 表意文字の漢字と意味希薄の仮名

「日本語の言語的特性として（中略）仮名は聴覚的——音感覚的に認知される傾向が大きい」¹¹⁾ し、「『表音文字』であるから、漢字と比べて意味が希薄である。」¹²⁾ そこで、漢字表記と仮名表記とが併行して行われた場合、前者の方がより具体的な事物を指し、合理かつ智的世界を表わすことに向いているのに対し、音だけを抽出するという点から見れば、仮名は言語の翻訳にではなく、コードの翻訳に関わっている。

例えば、「魔法で時を止めたとき、少年は魔物に襲われる一歩手前だった」という文において、「～したとき」の「とき」は形式体言で、あくまで特定の瞬間や状況を示しているに過ぎない。一方、漢字で書いた方の「時」は名詞として使われ、「時間」に言換えられる。

このように、表意文字としての漢字と、表音文字としての意味が希薄な仮名との併用により、読者に理解への深まりを促しているのである。

3.2 拡張的意味に理解される仮名

「表記に仮名を使用する場合には漢字表記のような意味の読み込みがない、拡張的な意味での使用が可能になる。」¹³⁾ ここでは、ひらがなとカタカナとに分けて見ていこう。

最初に、ひらがなを見てみよう。

漢字の草体から作られた草の仮名を更にくずして作った音節文字であるひらがなは、曲線が多く、字体が柔らかいこともあり、あくまでも日本人が「自ら内なる叫びを文字に託して他に伝えるために、漢字を音声文字として使用することを発明した」もので、その目

11) 前掲注3), p p. 110 - 111。

12) 奥垣内健 [2010]「カタカナ表記語の意味についての一考察：身体性とイメージの観点から」『言語科学論集』, p p. 79-92。

13) 前掲注12), p p. 79-92。

的は、「情緒的な感性世界を表わすこと」¹⁴⁾にある。

「いづことしなく／ししいとせみの啼きけり／はやせみとなりしか／せみの子をとらえむとして／熱き夏の砂地をふみし子は／けふ いづこにありや／なつのははれに／いのちぢかく／みやこの街の遠くより／空と屋根とのあなたより／ししいとせみのなきけり。」(室生犀星「蟬頃」『抒情小曲集』)とあるように、哀調を帯びた第二行の「ししいとせみの啼きけり」の「啼きけり」と、最終行でかな書きになっている「なきけり」(「鳴く」あるいは「泣く」にも解釈できる)とが、対照的に書かれているのは意味深いことで、犀星の向上意欲の強烈さ・切実さを表し、その「情緒的な感性世界を表わすこと」に寄与しているのである。

第二に、カタカナを見よう。

もともと漢字表記であるはずなのに、カタカナに直される原因は、「書き難い、読み難い漢字を読みやすくするため・話し言葉の特徴を表すため・独特な意味と語感を表すため・言葉を区切るため」¹⁵⁾である、と指摘されているが、ほかにも重要な働きがある。それは、カタカナは、デザインが鋭角的で省画化された形態を持つものであるという特徴をもっており、筆記者の書き癖を目立たなくし、書く身振り・手振りを覆い隠すことにより、書きつつあることから意識を遠ざけ、一般化・抽象化された対象につくことを容易にし、対象の比喩的拡張を表示することに向いている、ということである。

○実物としてのイメージを吹き払い、一般対象としての漠然たるイメージを伝えること
マルクスはどこかで、商品世界のなかにおける貨幣の存在は、動物世界のなかでライオンやトラやウサギやその他すべての現実の動物たちと相並んで「動物」なるものが闊歩しているように奇妙なものだと書いている。(岩井克人「広告の形而上学」)

○強調や対比を表すこと

二昔前のニューヨークで日本人ピアニストがコンサートを開いたときに「なぜコトじゃなくてわざわざピアノを弾くのか」と聞かれたような意地の悪い質問だとはけっして思っていない。(リービ英雄「なぜ日本語で書くのか」)

○親近性を生かすこと

「語彙性判断課題を行ったところ、単語では片仮名表記の反応時間が、平仮名表記や混合表記に比べて短く、表記の親近性の効果が確認された」¹⁶⁾との指摘通り、カタカナのほ

14) 葛谷登 [2005] 「漢字再考—音声言語と書記言語の狭間」『言語と文化』No.13, p175。

15) 夏秋菊 [2005] 「簡析日語片仮名表記的現状」『外語研究』2005年第4期, p p. 20 - 22。

16) 福田由紀・青山喜乃 [2014] 「手書き文字の筆跡と表記の親近性が自他の名前判断に及ぼす影響」『法政大学文学部紀要』第69号, p79。

うが、日本人にとって親近感があり、イメージを呼び起こすのに便利なものである。例えば、「ココロも満タンに コスモ石油」（コスモ石油）が挙げられる。

「ココロも満タンに」は、「エネルギーの安定供給を基盤に、エネルギーを通してお客様が心豊かに、毎日の生活を送れる」¹⁷⁾ というコスモ石油の希望が込められている。それは、お客様に満足していただく商品やサービスを提供するために日々努力を続けてゆくという志を、お客様のみならず社内にもアピールするという、コスモ石油のメッセージ・スローガンなのである。

「心」を「ココロ」と書くのは、まず形において「コスモ」と全体的により調和しているように見えるし、カタカナで書くと、それを目にした人に親しみを湧かせるからである。だが、もっとも重要なのは、ここの「こころ」は、生理的・物理的なものというより、むしろ精神的なものだという点であろう。

しかも、昔ながらの縦書きの場合、「こころ」や「ココロ」がつながっているように見えることにも関係があるろう。夏目漱石が小説名を「心」ではなく、「こころ」としたことを考えれば、より理解しやすくなるであろう。

近年、CI計画等のネーミングで、長年漢字で表わして来た社名を片仮名に変える会社、例えば、「安立」を「アンリツ」に、「豊田」を「トヨタ」にする企業が増加しているのは、「表記内容は同じ読みであっても表記法を変えることにより総合的イメージが変化する」という経験的知見に基づいたものと示唆される¹⁸⁾。

第三に、同じ意味あいながら、違った表記による違った心境を表わす言葉を見よう。

いずれも料理作りの場所を指す語彙であるが、作者の吉本バナナは、『キッチン』において、台所・^{ちゅうぼう}厨房・キッチン、というふうに使っている。

「台所」は和語で、「炊事あるいは食事をするところ。農家では一般に入口から土間に面した出居の奥隣に位置」¹⁹⁾ し、古くていささかごたごたした所である、というイメージであるが、同時に温かさをも感じさせる。「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」という小説の初頭から分かるように、主人公の美影にとって「台所」は祖母につながるものである。ゆえに、彼女が「台所」から感じ取ったのは、「頼り」と「安心」である。

しかし、祖母が亡くなった後、美影の心に映ったのは、もう「台所」ではなくなり、冷たくて真実味のない「厨房」に変わった。その後、同じく死別の経験がある田辺家に居候

17) コスモ公式サイト <https://ceh.cosmo-oil.co.jp/ad/mantan.html>。

18) 山崎直秀 [1983] 「漢字、平仮名、片仮名におけるイメージ特性の差異に関する研究」『デザイン学研究』1983 (44), p5。

19) <https://kotobank.jp/dictionary/britannica/974/>。

し、三人で互いに助け合ったり悲しみを分かち合ったりするようになり、やっと過去の虚しさや悲しさから抜け出て立ち直り、再び生活への情熱が湧き上がった後、美影の目に付いたのは、「台所」でも「厨房」でもなく、「夢のキッチン」であった。ここで「キッチン」と言い換えられているのは、「キッチン」が歯切れがよく発音し、力強くてきっぱりとしているうえ、明るく活気溢れるイメージのこの外来語から、美影は将来への希望を感じたからであろう。²⁰⁾

著者はこのような言葉の使い分けにより、主人公の心境の変化を浮き彫りにしている、と考えられる。

IV, 当て字 (宛字)

元々、表記符号がなかった日本では、漢字を用いて日本語を書き表すには、「やま→山」、「たに→谷」のように、意味上の対応関係をもつ漢字を使うのが普通であったが、対応する漢字がない場合、便宜的に、その成り立ちや意味や発音にそぐわない漢字の和訓や字音を借りて書き記した。さらに和語以外の外来語、外国語の表記にも及んだこの表記法、またはこの漢字を、当て字という。

当て字は、広く社会に認められた慣用的な表記と、個人的な臨時の表記（しばしば「誤字」とされる）を含むが、ここでは、前者だけを見ることにする。

この慣用的表記に、^{アジア}亜細亜、^{フランス}仏蘭西、^{ロンドン}倫敦のような国名や都市名や、^{シェークスピア}沙翁、^{キリスト}基督のような名前や、^{コーヒー}珈琲のような外来語などを漢字の音を借用して表記したもの、^{ぐずぐず}愚図愚図や^{とかく}兎角のように漢字音を借りて和語を記すもの、^{せびろ}背広のように漢字の和訓を借用して外来語を表記するもの、^{やはり}矢張り、^{でたらめ}出鱈目のように漢字の和訓を借用して和語を表記するものなどがある。ほかに、^{さみだれ}五月雨、^{もみじ}紅葉のように和語一語を漢字2字また3字で表記するもの(熟字訓)や、選考、世論のように、当用漢字(現在は常用漢字)の施行に伴って書き換えられた銓衡、輿論も当て字とされることが多い。²¹⁾このような当て字は、時代的色彩が強く、現代の読者に特異なイメージを与えることになる。

注意すべきなのは、^{アルコール}酒精、^{ダイヤモンド}金剛石のような「外来語と漢字を組み合わせた当て字」である。「この方法だと、外国語をあまり知らない人が読む場合でも、漢字から意味をくみ取ることができる」²²⁾。このような用法は、現代の日本語の表記に大いに生かされ、作者の意

20) 詳しくは、周関『吉本ばななの文学世界』(寧夏人民出版社 2005) 参照。

21) 詳しくは、亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編『日本語の歴史』第7巻(平凡社 2007)、『日本語の歴史 別巻』(平凡社 2008) 参照。

22) 伊藤光子 [2000] 「当て字について」『日本文学誌要 62』, p 83。

図、作品への理解などをそこから読み取ることができる。

現代では、「意味的な類似に基づいた用法で、表意的な表現といえる」^{ルール}「規則」のような「当て字」もあれば、「音の類似に基づいた用法で、表音的な表現といえる」^{よろしく}「4649」などのようなものもあり、殊に現代漫画において、よく活かされている。具体的な使い方に関して、後に見ていく「ルビの相互参照性」を参照されたい。

V, 訓読み

訓とは、漢文訓読の作業の中で生まれたもので、「日本語を話す人間が漢字を使いこなすには、概念文字たる漢字に音声言語としての日本語の意味の体系の中に組み込まれた音を充てなければならない。漢字の表わす概念に最も相応しい意味のある日本語の音、これが訓である。」²³⁾

日本語の中には、「同字異訓」と「同訓異字」の両方がある。訓と字の違いにより、単語の意味が大いに違うのである。

5.1 「同字異訓」

「同字異訓」とは、そもそも日本語の長い歴史の中で、違った時代や違った人などにより、異なった漢字を日本語が借用して一つの意味を表したゆえ、1つの漢字に複数の訓(同字異訓)が存在することを指す。²⁴⁾ その「同字異訓」には、「文字列の一致(更に、<抱く—抱く>のような $X_a = X_a$ 。双方とも、漢字+仮名>と、<外—外>のような $X = X$ 。双方とも、漢字のみ>)」と、「文字列の不一致(更に、<歩む—歩く>のような $X_a \neq X_b$ 。双方とも、漢字+仮名>と、<偽—偽る>のような $X \neq X_a$ 。漢字のみと、漢字+仮名>)」というふうに分類することができる。²⁵⁾

同じ漢字に対して、上記の分類における、「いだく」と「だく」、「そと」と「ほか」、「あゆむ」と「あるく」などのように、まったく違った心象を抱かせる「訓」もあれば、「駆け込み乗車は大変危険です。お止めください」などのように、前後の文脈に基づいて判断しないと、駆け込み乗車をしようとする人間を周囲の人が制止するという意味の「オトメクダサイ」と、駆け込み乗車をしようとする本人に自制を促す表現の「オヤメクダサイ」²⁶⁾、という二つの意味に捉えられる「訓」もある。

23) 前掲注14), p170。

24) 漢字受容の歴史の中で訓が自然淘汰されたり、『当用漢字表』『常用漢字表』などの制定とともに訓の整理が進んだり、「送りがなのつけ方」などに基づく送り仮名が普及したりするにつれ、今随分減少、規範化されてきた。

25) 玉村禎郎 [2013] 「同字異訓」『杏林大学外国語学部紀要』第25号, p67。

26) 前掲25), p p. 68 - 69。

5.2 「同訓異字」

異なる漢字だが、同じ訓を有するものの組み合わせは、「異字同訓」という。

この組み合わせには、「字義がほぼ同じで、同様の使い方ができる漢字」、「字義が類似しているが、違いがあり、書き分けられる漢字」と「字義がまるで異なるが、たまたま訓では同じ読みをする漢字」、という三種類のものがある。品詞から見れば、「同訓異字」現象に、「あと」（後・后・痕・跡・址・墟・蹟・踪）のような名詞と、「あける」（開ける・空ける・明ける）のような動詞と、「あつい」（熱い・暑い・厚い・篤い）などの形容詞と、「やすらか」（安らか・泰らか・康らか・靖らか・寧らか）などの形容動詞と、「まったく」（全く、完く）などの副詞がある。²⁷⁾

上記の「異字同訓」の「訓」は、異なった意味を表わすものが多いので注意すべきだということはあるまでもない。しかし、違った「訓」の巧みな使用により、違った心象的イメージを表わすことを通して、作者が読者に自分の気持ちをより完璧に伝える、という役割をもっと重視すべきである。

前に挙げた林望「夢を立てる人々」をもう一度見よう。「まったく新しい塔を創る（中略）平成の宮大工の技術を集大成して、どこにもないものを創るのだという志が、おのずから天を衝く塔の形となって、今天壤の間に現れつつある。そうやって二百年後の重要文化財を創っているのだという気概が、現場に満ち満ちている。」とあるように、「つくる」の「訓」として、「創、作、造」があるが、それぞれ意味あいもイメージも違うということは説明するに及ばない。普通ならば、塔を「造」と書くはずであるが、「創」と表記して、大工たちの一生懸命に頑張っている姿に対する、著者が自らの「日本は、まだまだ捨てたもんじゃないぞ。日本の若者たちも捨てたもんじゃないぞ」という実感を強調し、その「涙ぐましい思い」につながるのである。それから、「つく」の「訓」も多くあるが、ここで「衝」という「訓」で、塔が聳え立っている姿を生き生きと描写し、宮大工たちの仕事の偉大さを際立てている。

VI、ふりがな（ルビ²⁸⁾）により伝達しようとする作者の意図

ふりがな（ルビ）は、漢字などの読み方を示すのみならず、以下のように使われ、作者

27) 詳しくは、「同訓異字」(https://www.weblio.jp/wkpja/content/同訓異字_同訓異字の概要) 参照。

28) 叢艶、高久雅生 [2018] 「唐詩作品の本文フルテキストに対する TEI マークアップ手法の提案」(『情報知識学会誌』 Vol.28, No.2, p 178) は、「ルビは、現代文や古典籍の文章のある文字に対し、振り仮名や文字の説明、音読、異なる読み方などを原文資料の親文字より小さな文字で付与されるものである。それは日本語の文章では、漢字の発音や、漢字の説明などに役に立つ。ルビはモノルビ、グループルビと熟語ルビの3つの種類がある」としている。

の創作意図を伝えるのに役立ち、今日、さらによく使われるようになっている。

6.1 読み方と意味の提示

早くも明治時代に、ふりがなの効用として、次のように指摘されている。

- 一、漢字に種々のよみ方のあるのを、いかに讀むべきかを明示して、著者の欲する通りに讀者に讀ませる。即ち、著者の言葉を最正確に傳へる方法である。
- 一、通讀を容易ならしめる。(ふりがなのある方が早く讀める事は、心理學の實驗で証明せられたと記憶する。)
- 一、同一の漢字を人によつて色々によんで言語が不統一になるのを妨ぐ。
- 一、知らないものに漢字のよみ方を知らせ、又、言葉をどんな漢字で書くべきかを敏へる。²⁹⁾

佐竹秀雄(1980)も、訓には、A 正誤に関する意識、B 標準化に関する意識、C 表記効果に関する意識、D 表記効率に関する意識、E その他(好悪・美醜など)がある、としている。³⁰⁾

これほど多くの働きをもっているからこそ、「振り仮名は現代にもその命脈を保っている。新聞での使用実態を調べてみると、新聞1紙当たりの平均数が、1998年で46.86(1500/32)、2000年で67.19(2150/32)となっている。また、用例の約8割が漢字のよみを示す振り仮名であった。」³¹⁾

6.2 ルビの相互参照性による修辭的作用

「言語音の一次的、單線的展開に対して二次元的、複線的構造を文章に持ち込み、言語の意味だけでなく、発話の意味(場面や情感の内実)に代わりうるものを加えようとする」³²⁾という働きもある。それゆえ、「音訓混交主義、ルビ主義が、異質言語の自国語に引きつけた解読力の源泉となるだけでなく、それをもとにした創作へのエネルギーになる」³³⁾のである。具体的言えば、振り仮名には、比喩性・媒体性・触覚性・形式性があり、複数ものを結びつけたりテキストの相互参照を可能にしたりすることができる。³⁴⁾

このよな「ユゴゾダス農村脱出」によって近代都市の住民たる「たいしゅう大衆」が出現することになる。その特徴は、だいち大地や旧来の共同体との結びつきを失って都会にぐんしゅう群衆としてふゆう浮遊する、

29) 橋本進吉 [1938]『ふりがな廃止論とその批判』白水社、pp. 415～416。

30) 詳しくは、佐竹秀雄(1980)「表記行動のモデルと表記意識」(『電子計算機による国語研究X』国立国語研究所報告67 秀英出版)参照。

31) 内山和也 [2002]「振り仮名表現の諸相」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第51号、p301。

32) 木坂基 [1976]『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房、p390。

33) 由良君美 [1973]「日本語の修辭力」『言語』2(1)、pp. 11 - 18。

34) 前掲注31)、pp. 301 - 305。

帰属なきばらばらの個人の集合だということだ。(西谷修「移動の時代」)

上記のテキストには、「大衆」「出現」「大地」「旧来」「群衆」「浮遊」「帰属」に振り仮名をつける目的は、読み方を示すことにある。が、「農村脱出」に振られた「エゴゾダス」は、『旧約聖書』に記載された「出エジプト」に出た「Exodus」である。ここで、「農村脱出」を目にしたとき、読者は、この行為は実は人類の発展史上において、イスラエル人のエジプト脱出と同等な意義を持っていると、イメージするようになるであろう。なぜなら、作者が自ら解説しているように、「近代の『自由』の理念の具体的な発見は、旧来の共同体的生活からの『離脱』を、過去や出自と言った『自然的』拘束からの『解放』として積極的に生きた人々の意識と不可分」で、「都市はそのように『入ってゆく』ところではなく、『出てゆく』ところとして位置づけられた。拘束されない何かへの『出口』だったのだ」からである。

それから、再び室生犀星の俳句を例にしてみよう。「^{うめ}紅梅さげしをみなに道をたずねけり」のように、「うめ」という振り仮名（俳句の字数の制限）と「紅梅」という漢字との絶妙なコンビにより、元気で生き生きとした若い娘の頬の色などとの間に、ある程度のつながりを生じさせている。「^{おとめ}少女らのむらがる芝生萌えにけり」のように、「未婚の女性。処女。」というイメージの「おとめ」という振り仮名と「少女」という漢字との組み合わせにより、清純でかわいらしい若い女の子たちが、芝生で萌えていることを活写している。

今日では、ルビをつけることによって複雑な意味を表すことの便利さが、漫画や字幕において大いに生かされている。古い時代の表記の工夫である振り仮名が現代にまで生き延びているこの「生命力」は、使用上の規範的制約がなく、自由に施しうることが「創造性」をもたらすのだと説明されている。³⁵⁾

例えば、「^{してなあってことだべう}口語の読みを示す」ものや、「^{チャレンジ}挑戦」などのように「異なる語種で、同義ないし類似の語義関係にある二者が用いられている。語種が異なる同義の語を重ねることでより意味を明確・特定化しているのではないかと考えられる」ものもあれば、「^{天使のささやき}エンジェル・ウイスポー」のように、読みに非・外来語を用いることにより、何らかの表現効果を図っているという外来語の読みを示すものや、「^{ゴールキーパー} G K」, 「^{ミッド・フィルダー} M F」のように、「書き言葉と話し言葉が一致していない。同義の異表現を統一して表現するために、英略語にルビを振ることが用いられる」ものや、「^{ワンオンワン}1対1」, 「^{イエローカード}警告」のような、「外来語として新規に入り、定着していくことが多い」スポーツ用語や、「^{あいつ}高木」, 「^{あそこ}喫煙所」のような「代名詞という性質上、人物や場所を明らかに指示しない

35) 詳しくは、浅田健太郎 [1997] 「ルビ」の発生と展開に関する研究」(広島大学修士論文) 参照。

表現である。普通名詞を示すことによって、指し示す事物を特定しようとする」代名詞や、「目撃情報」「大財閥」「実家」のような、「文脈や作品に依存して」「伝達内容が二重に示された用法で、相互に意味を補う役割を果たしている」言い換え表現などがある。「これらの用法から、同一の語に対し書き言葉と話し言葉が異なる場合に、語の読みと書き言葉の語形を同期させて示す、同義または異義の関係にある読みと語を同時に示すことにより意味を明確化、あるいは拡充するために当て字が用いられていることが考えられた。」³⁶⁾

VII, 句読点

句読点は、単に文章や文の区切りを示すだけではなく、テキストにおいて、作者の意図を伝えるにも非常に重要な働きをしている。

7.1 修辭的意味

「言明こそしないが、書き手の意図・伝達しようとする意思を読み取ること」ができるから、「句読法の適用は一種の修辭でもある」³⁷⁾とされている。よく挙げられる例として、次のようなものがある。

○「……」, 山田は何も言えなかった。

何かの事情で、何も言えなくなった気持ちを表わしている。

○「犬は死んだ」→→→「犬は、死んだ」

前者は、一つの意味のまとまりで、「犬は死んだ」という事実を述べているのに対して、後者は、「犬」と「死んだ」という二つの意味の単位からなったもので、両方とも強調している。

○山田は笑った→→→山田は——笑った。

後者の方は、山田の笑いは、意味ありげなものであることを示している。

○ヤオ族の男は戸外に飛び出して——室内は暗いので——あくことなく眺めていたが、やがて、大急ぎで部屋にとってかえして鏡を持ち出してきた。(岩田慶治「自然のありか」)

「——」によって導かれた部分は、, 前に出たことに対する補足・説明・限定である。

○現代の技術といっても、その工法はまったくの伝統的組木工法であって、この二千年の間に、私たちの祖先が守り磨き上げてきた寺社建築の精髓といってもよいものであった(中略)この塔も平成の宮大工としての「新しい工夫」があちこちにこめてあ

36) 白勢彩子 [2012] 「『当て字』の現代用法について」『東京学芸大学紀要・人文社会科学系 I』, pp. 103 - 108。

37) 文部省国語調査室 (1946) 「くざり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」。

るらしい。それでも、もっとちがう何かの夢を、この優しい顔の棟梁は胸に秘めている。(林望「夢を建てる人々」)

宮大工たちが施している「工夫」は、「二千年の間に、私たちの祖先が守り磨き上げてきた寺社建築の精髓」で、決して新しいものではない。が、作者は、彼等が丹精を込めて「塔を創る」ことを強調している。ゆえに、これは「括弧付き」のものである。

○マルクスはどこかで、商品世界のなかにおける貨幣の存在は、動物世界のなかでライオンやトラやウサギやその他すべての現実の動物たちと相並んで「動物」なるものが闊歩しているように奇妙なものだと書いている。(岩井克人「広告の形而上学」)

商品世界を動物世界に例えれば、「貨幣」も「動物」とみなせるが、実際は動物ではない。依然として「括弧付き」のものである。

○人が実際に比較しているのは、ウィンドウの中のプディングの外見であり、メニューの中のプディングの写真であり、更に新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどにおけるプディングのコマーシャルである。これらはいずれも広い意味でプディングの「広告」にはほかならない。(岩井克人「広告の形而上学」)

中黒により、もともとつながりのない新聞や雑誌やラジオやテレビなどのメディアは、広告を載せる媒体であるという共通点を生じさせている。

○ヨーロッパとの暴力的な出会いの中で先住民がほぼ絶滅し、その後にはまず大西洋の向こうから、そしてやがては太平洋を越えてやってきた世界各地からの移民たちだけの「新世界」がつくられた。

先住民が減ぼされた後の、移民たちだけの世界はもちろん「新世界」である。しかし、ここの「新世界」は、決してこんな簡単なものではない。前に分析した「農村脱出^{ユゴゾダス}」もさることながら、キリスト教に関わりのあるものである。「[神]の約束によってわたしたちの待ち望んでいる新しい天と新しい地があります。そこには義が宿ります」(ペテロ第二3:13)。1620年、イギリスのピューリタンの非国教徒(清教徒)は、英国教会の迫害から逃れ、信仰の自由を求めてメイフラワー号に乗ってアメリカに渡った。生き残るために開拓者達が「神の栄光とキリスト教信仰の振興および国王と国の名誉のために(中略)公正で平等な法、条例、法、憲法や役職をつくり、それらに対して我々は当然の服従と従順を約束する」という内容の「メイフラワー誓約」を結び、「新世界」を築き上げた。よって、作者は「新世界」という言葉を用いることによって、植民者の残虐を風刺をしているように読み取れるのである。

7.2 作者の遠慮や尊敬の表現

その背景には、中国の昔の文章には句読点はなかったことと、「句読法は書き手と読み

手との力関係の交差する点である」³⁸⁾との指摘通り、書き手が句読点や濁点(符)を打ったら、句読点を用いて自らの論理や解釈の押しつけをしてしまい、読み手へは不敬である、という理解が挙げられる。これも、中日の近代において、句読点などの表記符号が従属的で地位の低いものとして扱われていた原因の一つである。

したがって、谷崎潤一郎「春琴抄」を例として挙げるまでもなく、今日に至っても、句読点や区切り符号の不在は、読み手に「テキストの改変」を許すことになるように思われ、打つ場合には、読み手の理解を妨げない範囲で行なわれなければならないという観点が根深く存在し、賞状や招待状や非常に丁寧な手紙や石碑の碑文などのような改まった文書には依然として句読点をつけない。また、「……」という小説の会話にも「。」をつけないことがある。

おわりに

テキストをより学術的・高尚的にするのに役立つのみならず、違った心象的イメージをもたらしたり連想的な意味を思い浮かべさせたりする漢字と、同じ意味ながら違ったモードを選択することのできる各種の語彙と、漢字の表意的機能とかなの意味の希薄性という特性を生かして意味を拡張的に理解させたり表わされたものを一般化・抽象化させたり違った心象的イメージを醸し出したりする表記法の併用・変容的使用と、時代的色彩を漂わせたりする当て字と、まったく違った心象を抱かせたり違った意味を表わしたりする「同字異訓」・「同訓異字」と、読み方と意味を提示したり読み方と漢字とのコンビに由来した相互参照性による修辭的働きを果たしたりする振り仮名(ルビ)、伝統文化に則って自分の遠慮や尊敬の気持ちを表わしたり修辭的働きを果たしたりする句読法、というものによってできた日本語の複雑な言語表記体系は、作者の意図をよりの確・より効果的に伝達し、作品を豊富多彩なものにするのに役立つので、テキストの鑑賞や文章の作成について、日本語の学習者への指導をするとき、重視すべきものなのである。

【付記】 本稿は、広東外語外貿大学「外国文学文化研究センター」客員研究助成金の成果の一部である。

38) 前掲注 37) に同じ。